

三二企画展

上田三平と若狭の古墳

ごあいさつ

福井県立若狭歴史民俗資料館 山本和夫

日本の考古学は、大森貝塚を発見したアメリカの生物学者モースによって始動したのだといった大雑把な筆法を借りれば、上中町（現）の古墳群を発掘した上田三平によって、若狭の考古学は本道を歩みだしたのだと言えましょう。

ともかく、上田三平は、日本考古学の至宝的な碩学でした。

私は上田三平の一生を、明治維新で広い世界を知り、欧米文化の高さに驚き、『追いつき、追いこせ』と躍進続けた日本に重ねて考えます。一生貧しく、しかも有効な盾となる学閥に恵まれず、孤軍奮闘の人生を生きた上田三平でした。

私達は戦禍を避けてお互いに故里に疎開して知りあったのですが、ある日、彼が私の庵を訪れた時のことでした。小さな庭に横たわる苔むした岩に彼は腰を下ろし（現在、私はその石を三平座禪石と呼んでいます）独り言のように呟きました。

『あの紙巻煙草シガレットの煙、あれが、私の人生をつくったんだよ』

上田三平の少年の頃のことです。家業は貧しい羽賀の屋根葺だったので、少年は進学できませんでした。その日もいつものように父の仕事の手助けをしていると、黒いラシャの詰襟の洋服に、黒い短靴をはいた青年が紙巻煙草をくわえて通りかかりました。その姿を屋根の上から見下ろしていた少年は紙巻煙草をくゆらす『文化人』になりたいと思いました。

それが上田三平の「追いつき、追いこせ」の生活に飛び込むきっかけになったということです。日本は、明治、大正、昭和と、大躍進をしつつ平成を迎えました。世界文化の先端にたっています。しかし、日本は、反省すべき日をむかえています。

上田三平の一生は、現代人に何を考えさせるのでしょうか。この「上田三平と若狭の古墳」展はその「何」を語ってくれるでしょう。

この企画にあたり、各位に助言やお励ましなど、お世話さまになりました。そのご厚意に対し深く感謝しています。

上田三平略年譜

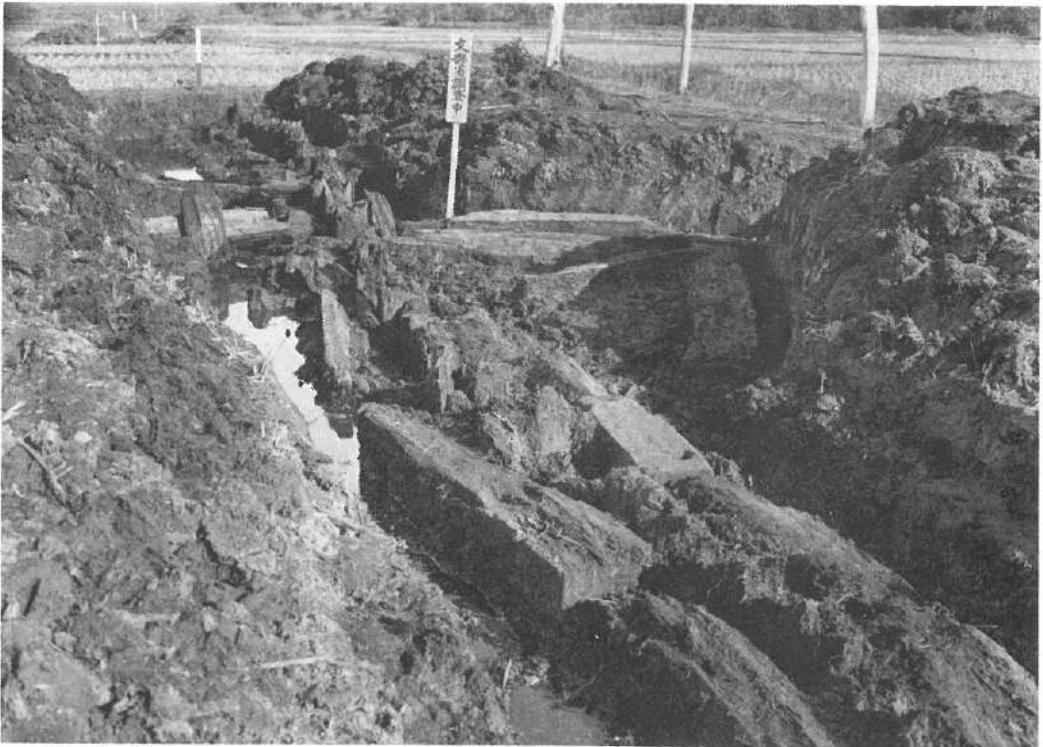
西 曆	年 号	事 項
1881	明治14	福井県遠敷郡国富村羽賀に生まれる。
1900	33	福井師範学校入学。
1904	37	小浜高等小学校訓導に補せられる。
1906	39	福井師範学校付属小学校訓導に補せられる。
1916	大正 5	遠敷郡瓜生村西塚古墳の発掘調査を担当。
1917	6	福井県社寺兵事課勤務。県下の史蹟調査開始。
1921	10	石川県史蹟名勝天然記念物調査嘱託。法皇山横穴発掘調査。
1924	13	奈良県史蹟名勝天然記念物調査嘱託。平城宮跡発掘調査。
1927	昭和 2	内務省史蹟名勝天然記念物調査会嘱託。
1928	3	文部省に所管替え。山梨県銚子塚古墳調査。
1930	5	秋田県弘田柵発掘調査。
1931	6	山形県城輪柵発掘調査。
1934	9	新潟県春日山城跡実測指導。
1937	12	山口県周防国庁跡実測。
1938	13	奈良県栄山寺行宮跡実測。
1942	17	愛知県嵩山洞窟調査。
1943	18	静岡県登呂遺跡発掘調査。
1944	19	九州各地の神籠石調査。
1945	20	空襲のため郷里小浜に疎開。文部省嘱託を辞す。
1947	22	山本和夫が主宰する鶉山農場にて青年達に講義。県内各地で講演。
1948	23	横浜市戸塚区中田町に転居。
1950	25	自叙伝『史跡を訪ねて三十余年』出版。12月19日没。享年70歳。

上田三平の足跡

若狭小浜の出身である上田三平は苦学力行して福井師範に入学し、福井県で13年間教員の職にあったが、大正6年から史跡名勝天然記念物調査嘱託として、福井県で4年、石川県で3年、奈良県で3年を勤め、昭和2年から内務省に転じ全国各地の史跡を踏査して、その保護に尽力しました。今日で言う史跡の指定と保存整備の仕事にあたります。

氏が検分し、あるいは発掘した史跡は数知れず、全国にその足跡をのこしている。中でも大正13年、奈良県在任中にてがけた平城宮跡については、歴史時代の史跡調査に発掘という考古学的方法を導入することを強く提唱されたことが、今日の平城宮調査の成果につながっています。昭和5年には秋田県の払田の柵、翌昭和6年には山形県城輪柵の発掘調査をてがけられ、古代の東北における柵跡の実態を明らかにされています。昭和18年には静岡市で軍需工場建設に伴う工事によって水田跡が発見され、戦時下にもかかわらず10日間の調査をおこなっている。これが戦後考古学ブームのきっかけとなったあの有名な登呂遺跡の最初の調査です。また考古学だけでなく、薬園史というだれもてがけたことのない分野の研究にも力をいれ、その成果は『日本薬園史の研究』に結実しています。

若狭においては、大正5年上中町西塚古墳の発掘調査を担当し、若狭考古学の先駆的業績となっています。これらは、今日の考古学の発展に寄与し、史跡の保存顕彰に大きな指針を与えたものと言えるでしょう。

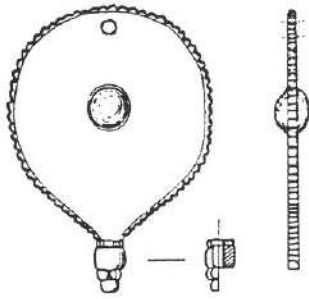


秋田県 払田柵の発掘調査状況（昭和5年）

展示古墳解説

《西塚古墳》

古墳時代中期の前方後円墳。国史跡。遠敷郡上中町脇袋に所在。脇袋古墳群中の1基。脇袋集落の西方、扇状地末端に位置する。大正5年、国鉄小浜線敷設工事の採土で石室の一部が露出。同年と同7年に石室内部を上田三平が調査した。その後、昭和45年、圃場整備にともない齊藤優が墳丘の一部と周濠の調査を行った。南面する墳丘は西くびれ部に造り出しをもつ。全長約67m、後円部径約27m、前方部幅約37m。2段築成で盾形の周濠がめぐる。葺石・埴輪をもつ。埋葬施設は墳丘主軸に直交する石室で、一般には竪穴式石室であろうと考えられている。長さ約5.4m・幅約1.3m・高さ約1.5m。石室内面は赤色顔料を塗布する。副葬品は中国製神人画像鏡1、仿製四獣鏡1、金製垂飾付耳飾1対、勾玉1、



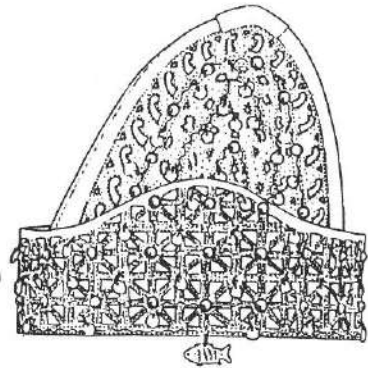
金製垂飾付耳飾 (1/1)

管玉約50、金銅製鉸具・同鈴付鍔板8枚以上、銀製鈴3、鉄製武器多数、武具（肩庇付冑・小札鉾留衝角付冑1・頸甲1・肩甲・横矧板鉾留短甲1）、馬具（鉄地金銅張鏡板1・同辻金具2・同剣菱形杏葉2）、鉄斧2、砥石2など。築造時期は5世紀中葉～末までの間で異論がある。発掘例の少ない若狭の5世紀代の古墳を考える上できわめて重要な基準資料である。また、大陸製の舶載品を多数保持する当古墳は、若狭国造の祖とされる膳氏の動向を反映するものであろう。

《十善の森古墳》

遠敷郡上中町天徳寺にある前方後円墳。県史跡。北川流域平野の南縁、低丘陵末端の緩斜面が沖積地に没する傾斜変換線上に立地する。昭和29年、齊藤優氏らが発掘調査。その後、昭和53年に墳丘測量、昭和60年に後円部の墳丘調査が実施された。墳丘は主軸を東西にとり、西面する。全長約67m、後円部径約43m、前方部幅約56m、後円部・前方部高約9m。前方部の発達した墳形を呈する。墳丘の大部分は盛土で、縄文時代後・晩期、弥生時代後期の包含層の上に築成されている。葺石・埴輪をもち、いくつか区画された周濠が推定される。後円部、前方部ともに墳丘中位に横穴式石室をもち、ともに主軸と直交して南西に開口する。後円部の横穴式石室はやや胴の張った台形をなし、きわめて短い羨道（前庭部）を付ける。玄室長4.2m・奥壁幅2.0m・玄門部幅1.2m・高さ2.5m。玄室内に全面に赤色顔料を塗布する。玄門部の構造は西壁沿いに石を立て、これと東壁に架けて楣石を置く。閉塞は玄門に接して1枚石で行われてきた。出土遺物は方格規矩四神鏡、帯金具、装身具（金銅製冠帽・勾玉・管玉・蜻蛉玉・棗玉・丸玉・小玉・平玉）、馬具（木心鉄板張輪

鏡・鏡板・杏葉・雲珠・辻金具・鞍金具)、武器(刀剣片・鉄鏃・金銅製三輪玉)、環鈴など。前方部石室は左片袖式で全長2.1m、玄室長1.6m・奥壁幅1.45m・高さ1.4m、羨道幅0.48m・高さ1.2m。壁面に赤色顔料を塗る。出土遺物は頭蓋骨、歯牙、刀剣片。また、石室上部の封土から須恵器が出土した。当古墳の築造年代は6世紀初頭頃と考えられている。後円部の横穴式石室は北部九州に類縁のある古式の横穴式石室で、5世紀中葉の向山1号墳以降、北九州の首長層との地域間交流が保持されている。



金銅製冠帽復元図

《丸山塚古墳》

古墳時代後期の円墳。遠敷郡上中町天徳寺小字丸山に所在した。北川左岸の水田中に位置する。南東200mのところにも十善の森古墳がある。昭和32年、北川堤防工事の土取りを理由に破壊され、爆破作業の合間をぬって斉藤優氏が調査した。墳丘は径50m以上、高さ10m以上の2段築成墳。幅20m前後の周濠をもつ。葺石、埴輪はなし。埋葬施設は若狭最大の片袖式横穴式石室であった。南東方向に開口する。玄室長6m・奥壁幅3m・玄門部幅2.7m・高さ4.3m、羨道長11m・幅1.5m・高さ2m。1～2mの巨石材が使用されている。出土遺物は、画文帯神獸鏡、玉類、馬具(杏葉・辻金具・鞍金具他)、武具(衝角付冑・挂甲)、武器(三葉式環頭・双龍式環頭・水晶製三輪玉・鉄刀・鉄鏃)、須恵器、馬骨片などであった。築造年代は須恵器(TK10型式)の年代から6世紀中葉と考えられ、この時期の若狭の首長墓である。

《大谷古墳》

遠敷郡上中町下中宇大谷に所在する、古墳時代後期の大型横穴式石室をもつ円墳。鳥羽谷入口東縁尾根の中腹にある。径約20m。尾根斜面と墳丘とを区画する溝をもつ。片袖式の横穴式石室は南南西に開口する。玄室長4.8m・玄室幅2.3m、羨道長5.5m・羨道幅1.5m。昭和31年、石室床面の清掃が行われ、馬具(双葉剣菱形杏葉)、武器、武具、ガラス製丸玉、金銅製空玉、須恵器などが出土した。築造年代は6世紀前半とされる。



双葉剣菱形杏葉 (1/2)

《向山1号墳》

古墳時代中期の前方後円墳。遠敷郡上中町堤・下吉田に所在。前方後円墳1、方墳1、円墳7よりなる向山古墳群のうちの1基。西流する北川が形成した平野に向かって、北方より突き出た尾根上の先端近くに立地する。先端西斜面には銅鐸を出土した向山遺跡がある。標高85m、付近平地との比高45mを測る。尾根裾の土取りを契機として自然破壊が進んだため、昭和62年、63年度に上中町教育委員会が発掘調査を実施した。北東に面する墳丘は地山削出しを主とする2段築成墳で、全長48.6m、後円部径30.6m、前方部幅27.4m、くびれ部幅19.4mを測る。上下段斜面に葺石、墳頂と段間テラスに竈窯焼成の円筒埴輪列がめぐる。くびれ部には墳丘とは浅い溝で区分された台状施設があり、周辺から壺、甌、器台などの須恵器（TK208型式）や家形埴輪が出土している。また、前方部前端裾で蓋形埴輪が出土している。後円部の埋葬施設は前方部に向かって開口する横穴式石室であった。墓壙の平面形は羽子板状をなす。玄室法量は長さ3.6m、奥壁幅2.3m、前壁部幅1.8m、復原高1.7m。壁体下1/3は削り出した岩盤を利用し、その上に割石を積み上げる、特異な壁体構築法をとる。玄門は側壁構築後、両袖石を立て、楣石を置き、割石を積んで前壁を造る。基部は玄室側に板石を立て土を埋めて袖石を受けるとともに、段状構造で玄室を区分する。玄門内法は52×70cm。玄門に接して一枚石で閉塞する。羨道は長さ3.6m、幅1.2m。玄門にむかって緩やかに下降する。側壁は石積みせず、天井石も架けない。副葬品は鏡2（仿製内行花文鏡、仿製鋸齒文鏡）、三角板革綴短甲2、刀剣類15、鉄鏃約40、刀子4以上、

盾隅金具3、金銅製三輪玉1、金製垂飾付耳飾1、勾玉4、管玉18、ガラス玉多数、琥珀玉多数、堅櫛30点以上。奥壁に立てかけられた多数の武器類や短甲胴内よりの金製垂飾付耳飾の出土など、奥壁沿いに密集した副葬品配置は追葬が行われた可能性を示唆する。一方、前方部では墳頂中央で武器・武具を納めた長方形の土壙を検出した。長さ3.9m、幅1.1m、深さ0.35m。遺物は長方板革綴短甲1、刀剣類12、鉄鏃3束約50。その配置からみて人体埋葬は行われていない。長方板革綴短甲の存在から初葬時の施設と考えられる。向山1号墳の築造時期については、その下限をくびれ部出土の須恵器（TK208型式）の年代とし、上限を竈窯焼成の埴輪の出現と限定できる。よって、5世紀中葉の築造と考えられる。すなわち、近畿地方で最も古い横穴式石室のひとつであり、すでに追葬観念を伴っていることは重要である。朝鮮半島製の金製耳飾、多量の武器、いち早い北部九州からの横穴式石室の受容など被葬者の生前の武人的性格や北部九州・朝鮮半島との関わりが認められ、日本書紀に記される膳氏の活動と符合して興味深い。



金製垂飾付耳飾 (2/3)